

肉用牛経営の収益動向と要因分析

繁殖経営

(1)年次別にみた収益性の動向について

(1)-1 1989～2001年度における収益性の動向について

表 - 1 肉用牛繁殖経営の収益動向

集計年度		1989年	1990年	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	
集計戸数		215	218	197	199	136	119	115	114	108	99	121	157	161	
成雌牛頭数規模		14.3	16.6	13.3	13.3	14.5	14.4	19.9	20.0	18.0	19.2	18.6	24.5	22.4	
売上高	子牛販売収入	357,206	336,754	333,071	292,874	245,504	252,519	242,162	279,361	274,339	271,806	251,420	268,701	251,250	
	その他収入	9,981	6,170	6,022	9,713	7,158	6,690	65,908	7,807	11,040	6,015	4,757	3,934	5,057	
	計	367,187	342,924	339,093	302,587	252,662	259,209	308,070	287,168	285,379	277,821	256,177	272,635	256,307	
売上原価	期首飼養牛評価額	113,812	128,000	123,838	113,885	103,473	106,473	153,723	120,580	117,595	103,910	122,446	135,098	105,711	
	当期生産費用	種付け料	8,745	8,831	9,786	10,340	9,363	9,440	10,582	11,187	13,998	12,925	12,537	14,305	13,223
		もと畜費	42,397	46,259	57,248	47,185	23,314	33,071	40,293	37,825	28,597	27,931	29,418	24,222	28,163
		購入飼料費	66,316	68,337	72,961	75,419	71,148	71,257	87,574	80,044	89,479	80,227	81,665	78,965	73,571
		自給飼料費	14,877	13,873	13,345	13,581	11,370	12,556	10,717	13,237	10,651	11,169	11,945	9,616	10,495
		労働費	136,514	141,495	150,484	162,879	152,075	145,251	130,373	150,036	147,303	150,353	150,441	128,360	135,684
		減価償却費	60,147	60,800	56,897	64,599	57,460	58,492	55,704	60,310	53,212	57,579	52,957	52,253	48,717
		その他	33,608	34,837	32,538	33,400	29,275	30,364	35,613	34,740	31,765	34,828	36,941	36,177	37,115
	計	362,604	374,432	393,259	407,403	354,005	360,431	370,856	387,379	375,005	375,012	375,904	343,898	346,968	
	期中成牛振替額	49,448	57,511	62,864	60,309	48,038	46,251	48,250	52,253	36,531	42,843	40,564	42,449	44,023	
	期末飼養牛評価額	128,127	150,647	142,963	138,913	109,073	116,682	163,987	137,516	124,047	112,155	147,455	146,735	122,325	
売上原価	298,841	294,273	311,270	322,066	300,366	303,972	312,342	318,190	332,022	323,924	310,331	289,812	286,331		
売上げ総利益		68,346	48,651	27,823	-19,479	-47,705	-44,763	-4,273	-31,022	-46,643	-46,102	-54,154	-17,177	-30,024	
販売費・一般管理費		32,287	30,625	30,716	30,161	30,817	30,415	34,148	32,250	32,883	31,296	29,545	30,888	28,125	
営業利益		36,059	18,026	-2,893	-49,640	-78,522	-75,178	-38,420	-63,272	-79,526	-77,398	-83,699	-48,065	-58,149	
営業外収益		16,146	19,379	14,841	15,693	17,421	32,689	23,480	18,639	16,073	14,422	19,787	23,477	21,201	
営業外費用		19,315	20,454	15,308	17,290	24,365	23,842	23,147	18,956	17,692	15,148	16,826	16,721	12,319	
経常利益		32,890	16,951	-3,359	-51,238	-85,465	-66,331	-38,087	-63,589	-81,146	-78,124	-80,738	-41,309	-49,266	
経常所得		168,243	158,206	145,554	111,024	65,593	78,311	91,306	85,897	65,792	71,858	68,495	86,502	85,074	
償還額控除所得		130,369	125,367	119,313	77,680	42,208	44,546	44,931	45,062	30,357	48,461	41,468	63,814	72,867	
償還額償却費加算額		190,516	199,091	176,210	142,279	99,668	103,038	100,636	105,372	83,569	106,040	94,425	116,066	121,584	

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 1 は1989年度から2001年度までの各年度に決算期を迎えた診断対象経営の平均損益を示したもので、それぞれ成雌牛年間1頭当たりの数字を示したものである。これによると、繁殖経営の収益性の動向は、1989年度以降は一貫して下落を続け、1991年度には営業利益、経常利益が赤字に転落し、1992年度以降は、売上総利益も赤字に転落した。経常所得は1989年度の168,243円から1993年度には65,593円まで減少し、最低水準まで落ち込んだ。1994年度から営業利益、経常利益、経常所得等の指標が上昇傾向に転じたが、1995年度をピークとして96年度以降は再び下落に転じた。1999年度には再び1993年度時の水準に落ち込み、2000年度から回復傾向に入った。これは、わずかながら売上高が回復傾向にあることと、売上原価がやや減少傾向にあることによるもので、2001年度の傾向は2000年度に引き続き、ほとんど変わらない。

(1)-2 子牛販売収入の推移

1993年度から1995年度までの子牛販売収入は89年度以降最低の水準の24万円から25万円代を推移し、繁殖経営の収益動向を悪化させる主要因となった。その後、1996～1998年度には27万円台まで回復したものの、1999年度には再び25万円台まで低落した。2000年度の傾向はほとんど変わりが無く、272,635円、2001年度には256,307円にとどまっている。

(1)-3 売上高の推移

売上高は1989年度367,187円をピークとして1994年度の259,209円まで下落したが、その後、1995年度には308,070円まで回復したものの、再び下落が続き、1999年には256,177円まで落ち込んだ。さらに2000年には268,701円、2001年には251,250円まで低迷した。

(1)-4 売上原価の推移

1989年度の売上原価は298,841円であったが、1992年度には322,066円まで上昇した。翌年の1993年度には300,366円まで下落した後、再び上昇を始め、1997年度には332,022円まで上昇した。しかし翌年の1998年度より下落し始め、1999年度には310,331円、2000年度には289,812円、2001年度には286,331円と30万円を割り込んだ。

(1)-5 生産費用の推移

表 - 2 生産費用ごとの年次推移

	1989年	1990年	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
種付け料	8,745	8,831	9,786	10,340	9,363	9,440	10,582	11,187	13,998	12,925	12,537	14,305	13,223
もと畜費	42,397	46,259	57,248	47,185	23,314	33,071	40,293	37,825	28,597	27,931	29,418	24,222	28,163
購入飼料費	66,316	68,337	72,961	75,419	71,148	71,257	87,574	80,044	89,479	80,227	81,665	78,965	73,571
自給飼料費	14,877	13,873	13,345	13,581	11,370	12,556	10,717	13,237	10,651	11,169	11,945	9,616	10,495
労働費	136,514	141,495	150,484	162,879	152,075	145,251	130,373	150,036	147,303	150,353	150,441	128,360	135,684
減価償却費	60,147	60,800	56,897	64,599	57,460	58,492	55,704	60,310	53,212	57,579	52,957	52,253	48,717
その他	33,608	34,837	32,538	33,400	29,275	30,364	35,613	34,740	31,765	34,828	36,941	36,177	37,115

(注)各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 2 は、生産費用ごとの年次推移を示したものである。これによると、最も金額が大きいのは労働費で、12万円台から16万円台を循環的に推移している。1992年度の162,879円をピークに1995年度の130,373円まで下がり、その後再び上昇し始め、1999年度の150,441円まで上昇して2000年度には128,360円まで下落した。労働費の次に金額が大きいのは購入飼料費で、1989年度の66,316円から1997年度の89,479円まで右肩上がりで上昇した。1999年度の81,665円から徐々に下落し、2000年度は78,965円、2001年度には73,571円まで下落した。次に、減価償却費の動向は、5万円から6万円台を推移しており、1989年度の60,147円から1998年度の57,579円までほぼ同様の水準で推移してきた。しかしながら、1999年度の52,957円より下落し始め、2000年度には52,253円、2001年度には48,717円となり5万円台を割り込んだ。

(1)-6 売上高に占める費用科目ごとの割合

表 - 3 売上高に占める生産費用科目ごとの割合

	1989年	1990年	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
種付け料	2.4	2.6	2.9	3.4	3.7	3.6	3.4	3.9	4.9	4.7	4.9	5.2	5.2
もと畜費	11.5	13.5	16.9	15.6	9.2	12.8	13.1	13.2	10.0	10.1	11.5	8.9	11.0
購入飼料費	18.1	19.9	21.5	24.9	28.2	27.5	28.4	27.9	31.4	28.9	31.9	29.0	28.7
自給飼料費	4.1	4.0	3.9	4.5	4.5	4.8	3.5	4.6	3.7	4.0	4.7	3.5	4.1
労働費	37.2	41.3	44.4	53.8	60.2	56.0	42.3	52.2	51.6	54.1	58.7	47.1	52.9
減価償却費	16.4	17.7	16.8	21.3	22.7	22.6	18.1	21.0	18.6	20.7	20.7	19.2	19.0
その他	9.2	10.2	9.6	11.0	11.6	11.7	11.6	12.1	11.1	12.5	14.4	13.3	14.5

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 3 は各年度の売上高に占める生産費用科目ごとの割合を年次別に示したものである。これによると、売上高に占める費用のうち最も割合が高いのは労働費で、およそ40～60%で推移している。最も割合が低かったのは1989年度の37.2%で、以降、1993年度の60.2%をピークに増加し、いったん1995年度には42.3%まで下落した。その後再び50%台で推移し、1999年度の58.7%がピークとなった。2000年度には47.1%まで下落し、2001年度には52.9%と再び、50%台に戻っている。購入飼料費の動向は、1989年度においては18.3%であったが、その後はほぼ右肩上がり増加し1999年度には31.9%まで増加した。しかし2000年度には29.0%、2001年度には28.7%となり、2000年度以降は再び30%を割り込んだ。減価償却費は1989年度において16.4%であったが1993年度には22.7%まで増加し、その後は18%から22%で推移している。

(1)-7 売上総利益の推移

1989年度の売上総利益は68,346円であったが、その後低落し始め、1992年からマイナスに転落し1993年度には-47,705円まで下落した。翌年の1994年度は-44,763円、1995年度は-4,273円まで回復したが、1996年度以降は再び下落を続け、1999年度には-54,154円まで下落した。しかし2000年度は-17,177円となりマイナス幅は縮小し、2001年度には再び-30,024円となりマイナス幅が拡大した。

(1)-8 営業利益の推移

1989年度の営業利益は36,059円であったが、1993年度の-78,522.93円まで下落を続けた。翌年の1994年度には赤字ながら-75,178円、1995年度には-38,420円まで回復したが、1996年度以降は再び下落を続け、1999年度には-83,699円まで下落した。しかし、2000年度には-48,065円まで回復し、2001年度には-58,149円となった。

(1)-9 経常利益の推移

1989年度の経常利益は32,890円であったが、1993年度の-85,465円まで下落を続けた。翌年の1994年度には赤字ながら-66,331円、1995年度には-38,087円まで回復したが、1996年度以降は再び下落を続け、1999年度には-80,738円まで下落した。2000年度には-41,309円まで回復し、2001年度には-49,266円となった。

(1)-10 経常所得の推移

1989年度の経常所得は168,243円であったが、1993年度の65,593円まで下落を続けた。翌年の1994年には78,311円

となり、1995年度には91,306円まで回復した。その後、再び下落に向かい、6万円台後半から8万円台で推移し、1999年度には68,495円となった。2000年度には86,502円まで回復し、2001年度には85,074円となった。

(2)飼養規模別にみた収益性分析

(2)-1 1995、1999、2001年度における飼養規模別の収益性の動向について

1995年度の成雌牛1頭当たり年間労働時間は1～5頭層が239時間であったが、30頭以上層は76時間であった。労働時間の減少は労働費の減少をもたらし、1995年度の経常利益は1～5頭層が-171,816円、30頭以上層が-1,411円であった。いずれも赤字ではあるが飼養規模が大きくなるに従って経常利益は大幅に増加した。しかし経常所得は1～5頭層が69,883円、30頭以上層が65,342円であり、経常所得では成雌牛頭数規模別の格差は見出せなかった。むしろ1995年度の経常所得は5～10頭層が86,943円、30頭以上層が65,342円となっており、規模が大きくなるにつれて低落傾向を示した。

1999年度の成雌牛1頭当たり年間労働時間は1～5頭層が207時間であったが、30頭以上層は76時間であった。経常利益は1～5頭層が-51,118円、30頭以上層が6,178円であった。1995年度と比較すると、1～5頭層の労働時間が減少したことによって赤字額は縮小し、経常所得は1～5頭層が131,238円、30頭以上層が86,214円であり、1～5頭層が30頭以上層を上回った。

2001年度の成雌牛1頭当たり年間労働時間は1～5頭層が極端に増加しており367時間であったが、30頭以上層は73時間であった。この傾向は各年次とも大きな傾向の変化はないが、2001年度は各年次と比較して、売上高の水準が各階層とも低落し、さらに売上原価が低規模層を中心に増加しているため、経常利益は1～5頭層が-259,789円、30頭以上層が-7,046円となり、低規模層における収益性の悪化が進展した。

(2)-2 飼養規模別にみた売上高の年次推移

表 - 3 規模別にみた売上高の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	304,753	284,939	270,453	279,571	262,387	248,208			
1997年度	382,457	264,992	316,061	283,930	260,089	271,431			
1999年度	196,626	222,960	264,945	224,750	303,021	294,146			
2001年度	172,348	223,556	275,308	252,521	283,647	260,533	251,778	262,183	271,851

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 3 は規模別にみた売上高の年次推移を示したものである。これによると1995年度の1～5頭層の売上高は304,753円と30頭以上層の248,208円と比較すると5万円以上の格差があった。1997年度の1～5頭層の売上高は382,457円まで上昇したため、30頭以上層の271,431円と比較すると10万円以上に格差が拡大した。しかしながら、1999年度には1～5頭層の売上高が196,626円まで落ち込み、30頭以上層が294,146円とわずかに上昇したため、小規模層よりも大規模層の売上高が高くなる傾向に変わり、最も売上高の高い階層は20～30頭の層となった。2001年度には1～5頭層の売上高は172,348円、20～30頭層では260,533円であり、最も売上高の高い階層は20～30頭層の283,647円であった。

(2)-3 飼養規模別にみた売上原価の年次推移

表 - 4 規模別にみた売上原価の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	446,168	352,102	295,661	276,320	256,117	214,416			
1997年度	710,840	371,676	323,563	317,448	254,841	249,231			
1999年度	292,759	368,591	325,759	262,166	291,151	251,061			
2001年度	442,802	326,334	306,516	239,856	272,609	247,216	252,390	250,431	235,917

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 4 は規模別にみた売上原価の年次推移を示したものである。これによると1995、1997、1999、2001年度ともに5～10頭層以上の階層では大きな傾向の変化はなく、階層が大きくなるにつれて売上原価が徐々に減少している。5～10頭層ではおよそ32～37万円、15～20頭層では23～31万円、30頭以上層では21～25万円となった。1～5頭層では年度によって大きなばらつきがあり、1995年度には446,168円、1997年度には710,840円であったものが1999年度には292,759円まで減少した。また、2001年度には442,802万円となった。

(2)-4 飼養規模別にみた売上総利益の年次推移

表 - 5 規模別にみた売上げ総利益の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	-141,415	-67,163	-25,207	3,251	6,271	33,792			
1997年度	-328,382	-106,684	-7,502	-33,518	5,248	22,200			
1999年度	-96,132	-145,631	-60,814	-37,416	11,870	43,085			
2001年度	-270,454	-100,078	-31,208	12,665	11,037	13,317	-612	11,751	35,934

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 5 は規模別にみた売上総利益の年次推移を示したものである。これによると1995年度は、1～5頭層が-141,415円の赤字だったのに対し、規模が拡大するにつれて赤字幅が減少し、15～20頭層からは3,251円と黒字に転換した。1997、1999年度は20～30頭層から黒字に転換した。1999年度は20～30頭層が11,870円、30頭以上層は43,085円で、1997年度よりも総利益額が拡大した。2001年度は1～5頭層が-270,454円の赤字で、規模が拡大するにつれて赤字幅が減少し、15～20頭層からは12,665円の黒字に転換した。

一方、小規模層は1999年度で-145,631（5～10頭層）～-37,416円（15～20頭層）の赤字で、1995年度と比較すると、赤字幅の幅は大差ないものの1～5頭層よりも5～10頭層の方が赤字額が大きくなった。しかし、2001年度には1～5頭層が-270,454円、5～10頭層では-100,078円となり、再び1～5頭層の方が赤字額が大きくなった。

(2)-5 飼養規模別にみた営業利益の年次推移

表 - 6 規模別にみた営業利益の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	-178,140	-97,914	-58,278	-24,839	-23,261	12,906			
1997年度	-370,151	-135,208	-41,718	-72,657	-28,253	-8,079			
1999年度	-109,098	-178,669	-89,920	-65,925	-16,701	13,938			
2001年度	-284,871	-125,015	-58,930	-17,651	-23,199	-13,482	-26,298	-15,040	7,455

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 6 は規模別にみた営業利益の年次推移を示したものである。これによると1995年度は1～5頭層が-178,140円の赤字であり、規模が拡大するにつれて赤字幅が減少し、30頭以上層から12,906円に黒字に転換した。1997年度は全階層とも赤字であったが、1999年度は30頭以上層が13,938円の黒字で、1997年度よりも営業利益は改善した。しかし、2001年度には、1～5頭層で-284,871円の赤字を最大として、40～50頭層の-15,040円まで赤字となった。2001年度の黒字は50頭以上層の7,455円のみであった。

一方、1999年度の5～10頭層は-178,669円の赤字、20～30頭層は-16,701円の赤字となった。1995年度と比較すると、赤字の幅は大差ないものの、1～5頭層よりも5～10頭層の方が赤字額が大きくなった。また、2001年度には、1999年度と比較すると1～5頭層では大きな格差が見られるが、5～10頭層以上、15～20頭層の階層では99年度の赤字額よりも2001年度のほうが赤字額が小さかった。

(2)-6 飼養規模別にみた経常利益の年次推移

表 - 7 規模別にみた経常利益の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	-171,816	-103,978	-53,098	-22,454	-8,245	-1,441			
1997年度	-400,630	-142,750	-37,768	-78,269	-18,914	-5,002			
1999年度	-51,118	-173,765	-93,223	-56,830	-9,986	6,178			
2001年度	-259,789	-110,780	-55,068	-9,743	-14,827	-7,046	-28,871	-5,126	23,580

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 7 は規模別にみた経常利益の年次推移を示したものである。これによると1995年度は1～5頭層が-171,816円の赤字で、30頭以上層では-1,441円まで赤字幅を減少させたが全階層とも赤字であった。1997年度も全階層とも赤字で、1999年度は、30頭以上層が唯一6,178円の黒字となり、1997年度よりも経常利益は改善した。2001年度には再び全階層とも赤字になった。1999年度の5～10頭層は-173,765円、20～30頭層では-9,986円の赤字となり、1995年度と比較すると赤字の幅は大差ないものの、1～5頭層よりも5～10頭層の方が赤字額が大きくなった。また、2001年度は5～10頭層から15～20頭層の赤字幅は1999年度よりも小さくなっている。

(2)-7 飼養規模別にみた経常所得の年次推移

表 - 8 規模別にみた経常所得の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	69,883	86,943	76,694	88,476	80,644	65,342			
1997年度	-18,268	47,744	94,531	59,304	90,246	65,701			
1999年度	131,238	32,230	84,660	51,525	91,435	86,214			
2001年度	45,201	64,700	104,433	98,360	95,056	74,523	65,525	75,886	86,520

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 8 は規模別にみた経常所得の年次推移を示したものである。これによると1995年度の経常所得は65,342(30頭以上層)～88,476円(15～20頭層)の範囲にあった。しかし、1997年度には-18,268円(1～5頭層)～94,531円(10～15頭層)に格差が広がった。さらに1999年度になると32,230円(5～10頭層)～131,238円(1～5頭層)に格差が広がった。しかし2001年度においては45,201円(1～5頭層)～104,433円(10～15頭層)の格差に縮小しており、格差の拡大傾向は解消している。各年次の階層間の傾向としては、20～30頭層、30頭以上層には経常所得が年々上昇する傾向があり、15～20頭層、5～10頭層には年々下落する傾向がみられ、10～15頭層には大きな変化はみられなかった。2001年度においても20～30頭層、30頭以上層で経常所得が上昇する傾向が継続しているが、5～10頭層においては年々低落する傾向から反転し増加に転じた。

(2)-8 飼養規模別にみた年間労働時間の年次推移

表 - 9 規模別にみた年間労働時間の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	239	193	133	131	101	76			
1997年度	307	179	128	134	102	74			
1999年度	207	188	154	116	96	76			
2001年度	367	184	164	104	97	73	83	77	55

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 9 は規模別にみた年間労働時間の年次推移を示したものである。これによると各年次とも規模が拡大するにつれて年間労働時間が減少する傾向に変わりはないが、1999年度には15～20頭層が1997年度の134時間から116時間へ減少し、10～15頭層は1997年度の128時間から154時間に増加した。

(2)-9 飼養規模別に見た販売保留時日令の年次推移

表 - 10 規模別に見た販売・保留時日令の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	281	293	303	294	289	292			
1997年度	314	285	293	295	291	300			
1999年度	234	291	283	278	271	279			
2001年度	298	296	293	295	295	300	302	295	302

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 10は規模別に見た販売保留時日令の年次推移を示したものである。これによると1995年度は281日（1～5頭層）～303日（10～15頭層）の範囲にばらついたが、1999年度は1～5頭層を除いて、ほぼ280日前後に集中した。各年次とも5～10頭層から20～30頭層についてはわずかながら下落傾向を示し、30頭以上層ではやや増加する傾向に変わりがない。

(2)-10 飼養規模別に見た販売保留時体重の推移

表 - 11 規模別に見た販売・保留時体重の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	276	263	254	263	260	248			
1997年度	272	261	258	253	248	257			
1999年度	281	290	277	280	276	277			
2001年度	263	263	267	262	258	258	253	258	264

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 - 11は規模別に見た販売保留時体重の年次推移を示したものである。これによると1995年度は248kg（30頭以上層）～276kg（1～5頭層）の範囲にばらついたが、1999年度は5～10頭層がやや高めではあるものの、各階層ともにほぼ280kg前後に集中した。また、1995年度および97年度のおよそ260kgと比べると約20kg増加していた。2001年度は1～5頭層が263kg、30頭以上層が258kgで各階層の格差は10kg弱にとどまった。1999年度と比較すると、およそ20kg減少している。

(2)-11 飼養規模別にみた平均分娩間隔の推移

表 - 12 規模別にみた平均分娩間隔の年次推移

	1～5	5～10	10～15	15～20	20～30	30頭以上	30～40	40～50	50～
1995年度	13.2	13.2	13.2	13.2	12.8	13.2			
1997年度	13.4	13.4	13.2	13.7	12.9	13.0			
1999年度	12.2	13.8	13.5	12.8	12.7	12.9			
2001年度	13.5	13.6	13.2	13.3	13.0	12.9	12.5	13.3	12.9

(注) 各集計年度中に期末を迎えた経営診断対象経営の実績。いずれも成雌牛1頭当たり。「畜産経営診断全国集計」総合集計結果をもとに作成。

表 -12は規模別にみた平均分娩間隔の年次推移を示したものである。これによると、1995年度から1999年度の平均分娩間隔は20～30頭層が12.7～12.9ヶ月で最も少なく、5～10頭層以上の階層では規模が拡大するにつれて分娩間隔が減少する傾向にあった。30頭以上層については20～30頭層よりも若干、増加する傾向にあった。2001年度は5～10頭層が13.6ヶ月と最も長く、30頭以上層では12.9ヶ月で最も短くなった。2001年度においても、5～10頭層以上の階層では各年次の傾向と同様、規模拡大するにつれて分娩間隔が縮小する傾向にある。